

e-dream-s 通信

No. 91 発行：2008年9月13日 特定非営利活動法人 イー・ドリームズ

お待たせしました。今月号は8月に行なわれた「ECAP2008」、「カンボジア視察ツアー」、「会員総会」を特集しています。参加者の声から各イベントの様子、熱意が伝わります。サンフランシスコからは楽しい報告が寄せられています。では、どうぞお楽しみください。

目 次

1. 8月の三大イベント	中川 房代	p. 2
2. 今時の桃太郎	辻 荘一	p. 5
3. ドルと英語：カンボジアの未来	井川 好二	p. 7
〈特集1〉 ECAP2008		
4. ECAP2008 を振り返って	岡崎 節子	p. 12
5. レクチャーとワークショップ	道面 和枝	p. 13
6. ECAP2008 を終えて	奥田 恵美	p. 15
7. Glimpses of ECAP 2008	Brian Nuspliger	p. 16
8. ECAP08-SEEC Korea	Keith Taynton	p. 17
〈特集2〉 カンボジア視察ツアー		
9. わらしべ長者への旅：カンボジア視察ツアー報告	塚本 美紀	p. 18
10. “Connecting dots” —カンボジア視察ツアーを終えて—	藤澤 俊之	p. 20
〈特集3〉 会員総会		
11. 少しの無理	岡田 かおる	p. 22
12. 総会に参加して	川本 剛士	p. 23
13. 定時会員総会に参加して	岡本 小枝	p. 23
14. <サンフランシスコ便り 11> Japan Culture Night	山田 昌子	p. 24
15. 【お知らせ】		p. 26

8月の三大イベント

中川房代

8月は、e-dream-sの3つの大きなイベントがありました。

1つは「ECAP 2008」です。2003年から始まったECAPも今回で6年目を数えます。昨年、東京で「日本の中学生に、日・韓・Native Speakerの教師のチームティーチングで、韓国文化を教える」というコンセプトで行った「ECAP 2007」を、今年度は韓国で「韓国の生徒に日本文化を教える」ことを目的に実施しました。

日本からは、11名の日本人教師（岡崎、奥田、神谷、辻岡、中川、藤本、岡田、鷺坂、中松、室山、道面）と2名のNative Speaking Teachers（Brian、Keith）、韓国からは、ソウルSETA（ソウル中等学校英語教育研究会）の会員11名、Seoul English Education CenterのNative Speaking Teachers 4名が参加。4つの授業グループに分かれ、韓国の小中学生に日本の文化（学校行事、折り紙、食：素麺、百人一首）を伝えました。授業内容についてはきちんと準備を行い、計画した通りに実施することができました。プログラム自身は内容も濃く、ソウルの最新の英語教育施設の見学や教員研修の一端も体験することができました。が、残念だったのは、今回は様々な条件や理由が重なり、チームティーチングの形が十分できなかったということでした。

今回で、従来のECAP（日・韓で実施してきた）は、第1段階の目的は達成したとして、来年以降については、目的、内容、時期、開催地などを含めて検討していきたいと考えています。

2つめは「カンボジア視察ツアー」です。2月の「CamTESOL 2008」で作ったカンボジア英語教師とのコンタクトを今後につなげ、e-dream-sの教育支援事業の道を探るツアーとして行いました。塚本理事、井川顧問、藤澤理事3名が参加し、学校訪問、授業見学、英語教師とのミーティング、社会起業家や地域・村の行政に携わる人たちとも会うことができ、充実したツアーとなりました。

来年1月には今回のツアーの現地でのコーディネートをしてくださった英語教師 Sokhom 先生が来日し、カンボジアの教育事情についてお話くださることになっています。また「CamTESOL 2009」への参加・発表に向けての体制も作りつつあります。

第29回理事会、第9回会員総会でも確認されましたように、e-dream-sの教育支援事業の形を2段階に分け、第1段階としては、英語を学ぶ（学ぼうとする）生徒・学生への奨学金制度を創設したいと考えています。どの地域で、どんな形で実施するのが妥当かについては、カンボジアのコンタクトの方々と相談しながら今後約1年間ではっきりさせていきたいと思っております。この奨学金制度を軌道に乗せながら、第2段階での本格的な教育支援事業に向けて、計画や準備を進め

ていきたいと考えています。

最後に、8月30日に開催した「第9回定時会員総会」です。年に1度正会員が一堂に会して e-dream-s の事業の成果と課題、今後の方針を論議するのが会員総会です。今回も e-dream-s が1年間に行ってきた全ての事業の報告、今後1年間に実施する方針について、各担当者から発言がありました。

2007年度事業総括では、「ECAP 2007」「助成金」「CamTESOL カンボジアツアー2008」「ホームページ」「e-dream-s 通信」「2007年度収支決算」に関して報告がありました。「ECAP 2007」報告では、実行委員会から、日本・韓国・NSTの英語教師3者のティームティーチングによる、韓国を紹介する授業や文化交流の成果、生徒募集の苦勞などが語られ、「CamTESOL カンボジアツアー2008」では、e-dream-s・ACROSS から2本の発表を行い、そこで、カンボジアの英語教師や英語教育団体との繋がりができたことの報告がありました。

以下、会員総会議案書より「2007年度事業の成果」（辻代表理事）を引用します。

多岐にわたる2007年度の事業についてはまずなにより「ECAP 2007 Tokyo」の成功を挙げなければなりません。日本と韓国の英語教師に加えてアメリカ、オーストラリア、イギリスからネイティブスピーカーの教師も参加し、三者が協力して日本の中学生に英語で韓国文化を紹介するというプログラムは、生徒たちにとって貴重な体験となっただけでなく、教える側も教師として成長するという大変意義深いものになりました。韓国の先生方との協働により、両国の交流と相互理解を深めてきた ECAP ですが、「ECAP 2007 Tokyo」は一つの完成形といえるでしょう。また実施において、「子どもゆめ基金」と「日韓文化交流基金」の二つの団体からの助成が決定し、財政面もさることながら ECAP の社会的認知を高めるという意味で大きな成果でした。

またカンボジアでの教育支援事業の可能性を探るために、調査事業として「CamTESOL カンボジアツアー 2008」を企画・実施したことも未来に向けての大きな成果でした。現地の状況を調査するだけでなく CamTESOL では「ECAP 2007」についての発表等を行い好評を得ました。カンボジアは e-dream-s にとってさまざまな可能性を秘めている国である事がわかってきています。

2008年度事業方針では、「ECAP 2008」報告、「カンボジア視察ツアー」報告、「CamTESOL ツアー2009」方針、「フォーラム（ACROSS 大阪支部で実施）」報告並びに方針、「2008年度収支予算」について報告があり、特に「ECAP 2008」「カンボジア視察ツアー」の報告では、写真やビデオを見せながらの報告でしたので、現地の様子がよくわかりました。

2008年度は「ECAP 2008 Seoul」をできるだけ「ECAP 2007 Tokyo」に近い形で実施し、さらに韓国の英語の先生方とのつながりを深めることと、カンボジア調査事業を受けてカンボジアでの教育支援事業や日本・韓国・カンボジア、3国とネイティブスピー

カーの教師が協同する ECAP の新しい展開の可能性を探っていくことが大きな目標です。

(第9回定時会員総会議案書「事業の基本方針」(辻代表理事)より)

「CamTESOL 2009」に向けては、既に参加者の募集が始まっています。皆さんの積極的な参加で、e-dream-s の活動を広めるとともに、教育支援事業の進展をめざしていきましょう！

今時の桃太郎

辻 莊一

というタイトルのエッセイを書いた事がある。10年以上前だ。「今時の桃太郎」というタイトルは、もちろんトマトの品種と、現代の子供一般に引っ掛けてある。当時このトマトには上の世代が懐かしむいわゆる「トマト臭さ」がほとんどない、近頃の子供たちは本物の味を知らないという意見を良く目にした。さらに今時の子供たちは塾とゲームばかりでガキ大将と遊ぶ事もない、そういうことが昨今の凶悪な少年犯罪に結びついているのだ、という人も多かった。もちろん私はこのような「よくある」意見には懐疑的なので、このエッセイは今時の子供たちだって昔の子供たちに負けず劣らずそれなりに充実した子供時代を過ごしているのではないかという趣旨で書いた。

ところが最近、生徒ではなく自分の子供たちと話していてどうもこれは全然違うな、と感じる事がある。インターネット、パソコン、テレビゲーム、携帯電話、iPod を当たり前とする時代に育った子供たちとそういうものが全くなかった私との世代間格差なのか、それとも個人差（子供たちはアニメ好きでいわゆるオタク傾向が強い）なのかはまだ判断がつかないのだが。

子供たちも高校生以上になると、それなりに大人同士の会話もできるし、一緒にテレビ番組や映画を楽しんだり感想を言い合ったりできるようになる。そうになると親としては自分がいいと思う映画や本を薦めたくなくなってしまふ。やりすぎると鬱陶しがられるので慎重にやる必要があるが。

論説○、物語×

いろいろ本を薦めるのだが、論説文やドキュメンタリーは読むが（もちろん興味を持てばだが）、物語は読めない。いわく「想像力がないから字を読んでもただになっちゃう。ハリーポッターだって途中でやめた。」ところが例えば、「戦下のレシピ—太平洋戦争下の食を知る」¹などという本は楽しんで読むのである。

人の顔と柱

以前黒澤明のあの有名な「七人の侍」をみんなで見ようということになり DVD（当時はビデオだったかもしれない）をレンタルしたことがある。ところが、これが不評で最後まで見せることができなかったのである。理由は、（1）人の顔と柱の区別がつかない、（2）何を喋っているか分からないである。（2）については、まあそうかなと、分かる。子供たちにとって聞き慣れ

¹斎藤美奈子著 岩波アクティブ新書

配給食材の工夫レシピから防空壕での携帯食まで、15年戦争下の婦人雑誌に掲載された料理記事は、「お台所の戦闘配置」をビビッドに伝える。人々が極限状況でも手放さなかった食生活の知恵から、銃後の暮らしぶりに迫ってみよう。再現料理もカラーで紹介。「食」を通して「戦争」を考えるための「読めて使える」ガイドブック。 http://www.amazon.co.jp/戦下のレシピ—太平洋戦争下の食を知る-岩波アクティブ新書-斎藤-美奈子/dp/4007000379/ref=sr_1_6?ie=UTF8&s=books&qid=1221266

ない言葉を、昔の映画にありがちだが甲高い早口でまくしたてる場面が多いので、聞き取りにくいのである。私自身にとっても聞き取り易いものではない。しかし、人の顔どうしの区別がつかないのではなく、「人の顔と柱の区別がつかない」とはどうしたことか？

あ、これは誰々の声

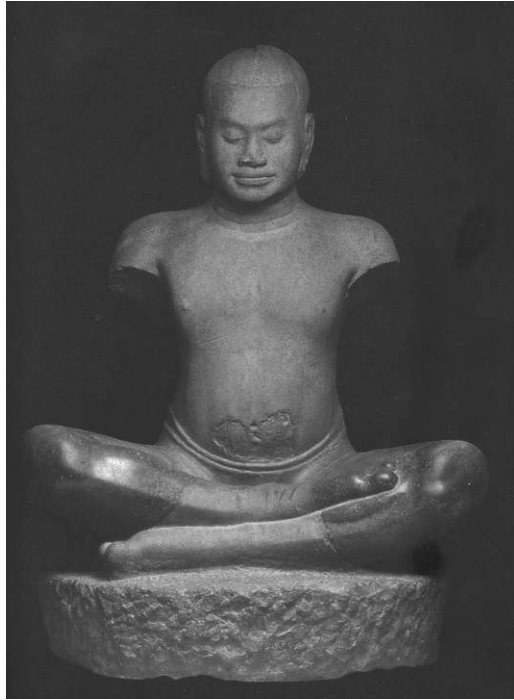
声の聞き分け能力が高い。これはもっぱらアニメの声優方面だが、バラエティ番組やドキュメンタリー番組のナレーターの名前を即座に言い当てる。もちろん好きなことには詳しくなるということなのであるが、ナレーションを聞いても内容を聞いているだけで、誰の声なのかなんて全く意識していない私などにとっては結構驚異である。

これらのことは育った時代が違うという事で一応説明がつく。テレビやインターネットが当然のものとしてあって、マンガやアニメとともに育ち、特に読書好きでなければ、文字情報から脳内に生き生きとした物語を映し出す能力が低下するだろう。また、生まれてからテレビ番組や映画は全てカラー作品で、ほとんどモノクロ映画を見たことがないのだから、モノクロ映画を見たときに、背景と人物の区別をつけられないのもしかたがないかもしれない。声に対する感度の高さは、最近アニメファン≒声優ファンという状態で、どのアニメのどのキャラクターを誰がやっているかを詳細に把握していることから来ていると思われる。

これはマンガ好きの親にコンピュータが4台もある家で育てられた、我が家だけの特殊事情なのかもしれないが、果たしてそうであろうか、同じような感性をもつ人もかなりいるのではないか、自分たちとはちょっと違うタイプの人たちが出てきているのかもしれない、と最近気になっているのである。

ドルと英語：カンボジアの未来

井川 好二



ジャヤバルマン7世像²

「そろそろ、お酒の時分どすなあ？」

と云い乍ら、女将が運んで来たのは、染め付け³の伊万里⁴の皿に盛られた、ホッケ⁵の一夜干し。焼きたて。「羅臼⁶のエエのが、入りましたよって」そうになると、久しぶりに、地元の日本酒「秋

² Jessup, H.I.(2004).*Art & architecture of Cambodia*. London: Thames & Hudson. p. 163. カンボジア、アンコール朝最盛時代を形成した王 (在位 1181～1220 頃)。この時代にカンボジアの勢威は大いに伸び、東は中部ベトナムにあったチャンパに、北方はラオス中部まで、西方はメナム (チャオプラヤ) 川流域に、南はマレー半島北部にまで及んだ。王は熱心な大乘仏教徒で、国内各地に大伽藍を建立したほか、首都を中心とした道路網の整備、102 に及ぶ病院の建設などを行なった。³陶磁器で、呉須(ごす)を用いて素地(きじ)に藍色の絵模様を描き、その上に透明釉を掛けて焼成したもの。また、その装飾技法。中国では青花という。[株式会社岩波書店 広辞苑第六版]

⁴いまり - やき【伊万里焼】有田焼の通称。江戸時代に、有田地方産の磁器の多くが伊万里港から積み出されたことに因む名。[株式会社岩波書店 広辞苑第六版]

⁵ほっけ：アイナメ科の海産の硬骨魚。東北地方・北海道に産。体は細長く、全長約 40 センチメートル、尾びれの後縁は二叉。灰色で、やや不明瞭な淡褐色の横走斑文がある。[株式会社岩波書店 広辞苑第六版]

⁶北海道東部、知床(しれとこ)半島南東側の町。人口 7,500。秋アジ漁・スケトウダラ漁を中心とする漁業の町。【新世紀ビジュアル】

鹿」といってみるか。

一時は、日本全体が、熱帯へワープしたかと思えるほど暑かった今年の夏も、ようやく衰えをみせ、スコールのような雷雨が通り過ぎるたびに、一歩ずつ秋へ近づいている気がする。日本酒の季節でもあるし、ものごとを少しはクールに考えられる頃でもある。



月の出 (2008年9月13日羽曳野)

「へーえ、これがカンボジアのお金ですか？」

「そや、500・・・なんやたっけ？」

「なんて書いてあるのか、数字しか分からしまへんけど、バックにあるのが、アンコール・ワットやくらいは分かりますえ」

「そや、なかなかカッコええやろ」



カンボジアの紙幣：500 レアル

「けど、センス、これ、日本のお金で、おいくら位どす？」

「それが、わからん？」

「ええ？」

「向こうにいるとき、カンボジアのお金、使こたことない」

カンボジアで、カンボジアの通貨リアルを使う機会がなかった。支払いは、いつもアメリカドル。向こうで何かを買って、アメリカドルで支払ったおつりで貰ったリアル札が、財布から何枚か出て来たが、たいした額だとは思わないが、どのくらい値打ちがあるのか、見当がつかない。

外国へ出かけることが多く、今までいろいろな国を訪れたが、こんな国は始めてだ。しかも、外国人だからという訳ではなく、カンボジア人同士でも、ドルで決済すると云うのは、それだけ地元の通貨に対する信用がないことを意味する。蓋し、これは異常である。

日本に返還される前の沖縄では、ドルが通貨として使われていたが、沖縄は当時アメリカ軍の支配下にあった。カンボジアは現在アメリカに占領されている訳でも、支配されている訳でもない。

原因の一つは、**Globalization**. 「国を超えて地球規模で交流や通商が拡大すること [株式会社岩波書店 広辞苑第六版]」を意味するが、カンボジアに進出した多くの海外企業が、給与の支払いや購入した物品の代金として、ドルを使うことにより、リアルとドルの二重通貨体制が出来上がったのである。

カンボジアの人口は、約 1,300 万人。東京都の人口とほぼ同じ。一人当たりの国内総生産(GDP)は、1,700 ドルで、日本円に直せば、年間約 20 万円。世界の最貧国と呼ばれる国々の、GDP 一人当たり、100 ドル以下と比べると、随分豊かに思えるが、日本の 34,000 ドルに比べると、20分の1しかない。

いまだに内戦の影響が残るのか、国民の平均寿命(2008)は、男性 59.65 歳、女性 62.83。何とも若すぎる気がするが、世界の長寿国日本の平均寿命と比較すれば、違いは明白である。日本の平均寿命、男性 78.73 歳、女性 85.59 歳。女性の場合、20 歳以上の差があることが分かる。



アンコール・トムへの続く門

この国の中学生の英語学習を支援するため、奨学金を送る計画が立ち上ろうとしている。まず、1口1万円の募金を100口分集め、一人当たり25万円の奨学金をカンボジア人中学生に贈呈する。対象者を選ぶために、カンボジア中学生の英語コンテストを実施する。

5年後には、カンボジアに、セミナーハウスを建設し、カンボジアと日本、あるいは、その他の国の、中学生、高校生、大学生、英語教師などが、研修のために利用できる施設とする。

「楽しそうなお話。いよいよ、ホンマにスタートしますのどすなあ」

「そや。やっと始まるで！」

「おめでとうございます。乾杯どすな！」

8月の企画ツアーで、多くの英語教育関係者と出会い、授業見学をさせて貰い、カンボジア人中高生の英語レベルの高さと、勉強熱心さに感心した。幸い、プノンペン近くの地方自治体の長であった人と知り合いになることができ、この計画を実行するにあたり、キーになる人たちへの橋渡しをしていただけそう。同時にさまざまなアドバイスも、いただけたと思える。

こう役者が揃ってくると、はやく本格的な活動を始めたい気になってしまう。

「けど、センセ、なんで英語ですのん？」

「なんでて？」

「そやかて、なんで日本語教育やおへんの？」

「英語が Global Language やからや」

「Global Language どすか？」

「そう、英語は、もうアメリカ人やイギリス人だけのものやなくなったんや。英語は、英語を使う人のものになったんや」

Global Language として、英語を話し、英語を教えてきたつもりである。カンボジア人も、Global Language としての英語でコミュニケーションすることにより、豊かにもなれるし、彼ら自身のアイデンティティを確立することもできるのである。

「それに、センス、もともと英語のセンスどしたなあ」

ドルも英語も、世界の Global 化の主役である。そのどちらにも、どっぷり浸かってきた私たちである。

世界の「エコノミック・アニマル」と云われた日本人が、世界の英語下手と云われ続けた日本人が、豊かな未来を目指すカンボジア人の英語教育をサポートすると云うのも一興。それに、日本人が一丁かまないと、Global Language としての英語も、迫力不足。

日本にとっても、カンボジアにとっても、世界にとっても、意外と明るい未来になりそうな気がする。(Sunday, September 14, 2008)

ECAP 2008 を振り返って

岡崎節子

ECAP2008 については e-dream-s 総会に文書で報告を出しているの、重なる部分は省こうと思う。

反省点の一番はプログラムの中心であった日本紹介授業について、韓国の先生や ALT との白熱したミーティングがまったくなかった事だ。過去の ECAP で体験したように、テキスト制作や授業などのタスクを通じて日韓双方の英語教師が真剣な話し合いをする中から、それぞれの文化に裏打ちされた授業観の違いが浮き彫りになったり、ノンネイティブ英語教師としての悩みを共有したりすることができる。それこそが ECAP の目指すところであり醍醐味であると言う事はお互いよく理解しているものと思っていたし、下見の際のミーティングでも手応えはあると思った。しかし、準備が進んでも参加者リストが届かず、11名の韓国側参加者の内、結局チームティーチに参加する韓国教員はごく一部で、大半の先生は授業の前に帰ってしまわれた。その事情について事前に連絡はなく、実行委員として先方とのコミュニケーションをどの様にとるべきだったのか、ECAP の意義から再確認して進むべきだったのか、万全の準備を整えて韓国に乗り込んだ日本人参加者の皆さんには実行委員として申し訳なく思っている。

一方、今回の日本側参加者の授業への準備はそれぞれ工夫が凝らされ、現地での急な変化にも対応できていた。また、授業はもちろん、研修中の韓国の英語教員と一緒にワークショップにおいても、英語での進行に不安を感じなかった。ECAP は今回で6回目となるが、日本側参加者の英語教師としての成長は、着実にすすんでいる事を実感した。

今回の ECAP でもう一つよかったことは、SEEC で研修中の英語教師と一緒にワークショップができたことである。短時間の交流ではあったが、彼らの英語運用能力と、研修への熱意には特に感銘を受けた。ここにも同志あり、といううれしい気持ちになった。

今後 ECAP は新しい展開をするだろう。新たなチャレンジに、胸の高鳴る思いがする。

レクチャーとワークショップ

道面 和枝

昨年が続いて今年も ECAP に参加させていただき、新たな経験や出会いをさせていただきました。その中でも、今回は SEEC (Seoul English Education Center) でのレクチャーとワークショップについて報告したいと思います。

今年5月にオープンしたばかりのこの英語教育センターは、生徒の英語学習プログラムと並行して、小・中学校の英語教員を対象とした研修プログラムを提供しています。コミュニケーションスキルの訓練を始め、生徒が受けている授業（全て **native teachers** による）の参観、模擬授業と参観、教授法に関するレクチャーなどのプログラムが毎日ぎっしりと組まれています。また、参加者には指導案作成、レポート、プレゼンなど、毎回沢山の宿題が出されており、私たちの滞在中も、自習室でプレゼンの準備に追われる韓国の先生方を多く見かけました。（プログラムの詳細については、SEEC の HP を参照してください。 <http://www.seec.go.kr/>）

この教育センターのプログラムを組織しておられる Noh 先生より、今回の滞在中、日本の英語教育事情と授業の実際についての「レクチャー」を依頼され、岡崎先生が高校、中川先生が小学校、そして私が中学校と担当を分かち、研修中の小・中学校の先生方にレクチャーを行いました。



上の写真は、中川先生が小学校の英語の授業のビデオを見せておられるところです。韓国の小学校の先生方は熱心に参観され、もちろん全て英語のレクチャーの内容もしっかり理解されていたようです。学習指導要領の改訂で、日本でも来年からいよいよ（やっど？）全校の小学校で「外国語学習」の週1時間の実施が始まるというくだりでは、意外だという意見が多く、それに関する質問も出されました。

次に、私が中学校の英語教育事情についてスライドを見せながら大枠を説明したあと、授業の実際をワークショップ形式で紹介しました。

プレゼンの中で韓国の先生方が興味を示されたのは、共に“EFL”の環境の中で、教室内で英語を使わせる活動をいかに多く作り出すかということ、生徒に文構造の違いを分かりやすく教える方

法、使える英語にするためのドリルの工夫、などでした。

実際の活動としては、ピクチャーカードを使った教科書本文の”oral presentation”（speakingにつなげるための、意味を伴った音読や暗唱をさせる活動）をペアでやっていただきました。ワークショップの後、ある韓国の先生方から、韓国では依然として文法中心の授業が多いので、このような簡単な英語の指示による、英語を使わせる活動は興味深かったという話をお聞きしました。



私たちのレクチャーの他に、ソウル大学講師である Dr. Lee Hyoshin によるレクチャーを、小学校の先生方と一緒に受けさせていただきました。テーマは”Classroom Observation”で、小グループに分かれてのディスカッションを中心に行われました。



グループごとに授業観察の視点を決めた後で、それぞれの項目に沿って小学校での英語授業のビデオを見て、再びその結果について分析するディスカッションを行いました。Dr. Hyoshin からは、授業観察を行う際には今回行ったようなプロセスが大切であること、**「授業観察の視点はできるだけ数値化できる明確なものがよい、観察中はしっかりメモを取る。」**などの助言をいただきました。

ディスカッションにおいても、韓国の小学校の先生方の英語力には驚かされました。日本では、このような研修が英語で行われるということ自体が不可能であろうし、ましてやディスカッションで英語で自分の意見を言ったりまとめたりすることは無理だろうな、と思いました。

Noh 先生も**“TEE(Teaching English Though English)**というスローガンを強調しておられましたが、この教育センターでの研修中も、先生方は生活場面の会話も全て英語、が原則であるとのことでした。**「数年後には、全ての英語教師が 100%英語で授業を」**、という意気込みを聞くと、日本の現状がかなり気になりました。自分も含めて、英語教師の英語力、コミュニケーション能力の向上が、やはり研修の必要性の上位である所以です。

その意味では、今回 ECAP2008 でレクチャーをするという機会を得たことで、異文化について分かりやすく英語で伝えるという大きなタスクに挑戦し、失敗も含めてさまざまなことを学ぶことが出来ました。実行委員の先生方を始め、関係の先生方には、本当にお世話になりました。

ECAP 2008 を終えて

奥田 恵美

「ごく普通の高校の英語教師である私が、韓国の英語村で韓国の生徒を相手に、英語で授業をした」、これってすごいことですよ？「世の中には素晴らしい先生方はいっぱいいらっしゃるだろうけれど、そんな経験をお持ちの方がいったいどれくらい、おられるかしら？」、そう思うと、ACROSS, e-dream-s に名を連ねている自分がとてもラッキーに思えます。そしてそういうことを可能にしてくれる団体に所属していることを、とても誇らしく思います。(課題がしんどくて、いつもアップアップしていますが。)

2005年から連続4回、ECAPに参加させていただきました。最初はおどおどと、そーっと首を突っ込んだのですが、自分自身が初級・中級・上級と進むにつれて、ECAPへの関わり方もどんどん変わってゆきました。それは大変しんどいことでもあるけれど、自分が一生懸命考えて、やりたいことを好きなようにやらせていただくことでもありました。一番しんどいのは、自分が何をしたいのかがわからない時であり、そのような時には、いつもアドバイスをいただきました。

英語が堪能で、テキパキと話を進める韓国の先生を相手に、自分の意見を主張する、あるいは異なる意見を述べることは、ほかでは得がたい経験でした。メールでは表現に気を使いながらも言いたいことは伝わるように苦心しました。そういう意味では、今年のECAPは最高でした。もちろん、当日の授業もとても楽しかったのですが、そこに至るまでの意見交換やミーティングの経験が最高でした。昨年、そんな凄い体験をしてしまっただけに、今年のECAPには少し残念な思いがつかまといいます。意見を戦わすどころか、満足なミーティングすら持てなかったこと、生徒についての情報が伝わらなかったこと、いずれも残念でなりません。

それでも、そんな残念な思いはあったとしても、「今年も参加してよかった」という思いは変わりません。ものすごく時間はかかったけれど、パワーポイントのスライドを作る作業は楽しく、自分のキャパがまた広がった、と思わせてくれました。日本料理の美しさを伝えたい、四季の季節感を伝えたい、と美しい写真をさがして、どれほどインターネットの世界をさまよい歩いたことでしょう。それだけに、イメージに描いた中学1年生(英語レベルは中3程度)の女生徒ではなく、小学生のヤンチャ坊主がぞろぞろと現れたときの驚き。”Did you enjoy studying English?”というアンケートの英文も韓国語に翻訳してもらわなければわからない彼らには、もっと別のことをしてあげたかったなあ、という思いが残りました。それこそ、英語の指示と一緒にcookingしたら、楽しかったかな？なんてね。

とはいえ、驚いているわけにはいかず、とにかく50分の授業を無事終えたこと、指導案もぶっ飛んで、できるだけ易しい言葉を選んで、いろいろな指示をしながら日本の夏の味覚のお素麺を味わってもらったこと、授業の中でどうしよう、どうしよう、と考えながら進めた授業は貴重な経験でした。(「根はまじめで小心者」の私は、準備をきちんとなしないととても不安なのです。)お代わりをねだって、お素麺をぺろりと平らげ、”Did you enjoy studying English?”というアンケートの質問に全員がYes、と答えてくれた韓国の生徒たちと実際にふれあえたことは、さらに貴重な経験となりました。

このような機会を、しかも4回も与えていただいたこと、非常にありがたく思っています。本当にありがとうございました。

Glimpses of ECAP 2008

Brian Nuspliger

I would like to describe a few things that impressed me during this year's ECAP program. Please don't expect this to be comprehensive or even a coherent collection, rather look at it as a set of "memory snapshots."

During the cooking lesson, I noticed some of the Korean boys had pierced ears and wore earrings. I was rather surprised; do Japanese elementary school boys pierce their ears? Was this a cultural difference or am I just getting older?

I was very impressed by the teacher trainees at SEEC. I noticed them speaking English to each other while waiting in line for breakfast and at 8 or 9 pm when they were completing homework assignments in the computer room.

Keith and I engaged in an impromptu game of ping pong on the evening after the barbeque at SEEC. I haven't played in at least 25 years (I am sure Keith will testify to this fact) but it was wonderful fun and a good workout. Maybe the beer helped...

During the culture lesson, some Korean students answered that summer vacation was their favorite school event. This reminded me of Japanese students from ECAP 2007 Tokyo who said that sleeping was their favorite leisure activity.

SEEC was a very impressive facility and I was amazed at the level of funding and commitment the Korean government has given to English education. I was also a bit jealous. Internationalization and foreign language education has been talked about and received generous funding in Japan during the past two decades (compared to other countries) but I have never felt the sense of commitment that I witnessed in Korea this summer.

ECAP 08 - SEEC Korea

Keith Taynton

This was my first trip abroad with the adventurous e-dream-s posse and as our group heading for Korea was sent off at the airport by the other half of e-dreamers who were heading to Cambodia, I wondered what this year's meeting would hold in store.

After landing, and a gruelling bus journey through the holiday traffic later, we finally arrived at the SEEC centre only to be whisked off again shortly after to spend the night in a distant training camp with lack convenient access to any beer to help oil the wheels of international teaching relationships.

However, our thirst was soon quenched due to the kindness of our hosts and we managed to make merry and get to know each other a little better. After an interesting night's sleep on the thinnest futon outside of a sumo wrestler's bedroom we returned to SEEC to begin the conference proper.

The day started well and everyone enjoyed the lectures and were, I think it's safe to say, astonished by the quality and variety of facilities available at SEEC. I turned fairly green with envy at the tools the teachers had at their disposal. It also made me wonder about the political commitment of Korea's government to English education compared to Japan's. Although the sum invested in the building was relatively small, the six month teacher training program was very surprising and shows how much Koreans value their population being able to communicate fluently internationally.

After the conference was over, ending on a slightly weaker note than it began due to Korean teachers having to return home early for other commitments, we headed to Seoul for a mini tour. During my walk around Seoul I was impressed with the very traditional ways of doing business. There was a large market area divided into various sections where you could buy many different types of goods (fish heads and elastic band retailers battled for space next to each other in one area!) and enjoy a community atmosphere that has been all but destroyed in many modern cities by faceless mega stores and online shopping.

Overall I enjoyed this trip to Korea and was impressed with the Korean's commitment to English education. We can only hope that the new Prime Minister will sit up and take notice of the advances being made in the region and start to support English in a similar way in Japan.

わらしべ長者への旅：カンボジア視察ツアー報告

塚本美紀

プノンペン空港のカフェで、I氏とF氏と冷たい生ビールを飲みながら、今回のカンボジア視察ツアーのことを振り返っていた。I氏が突然、「解放された顔してるなあ。」と私に言った。「そうですか？」と答えながらも、頭の中は、何とかツアーが無事に終わったというほっとした気持ちと、よくここまで辿り着いたなあという満ち足りた気持ちでいっぱいだった。

1年前は、カンボジアに一人の知り合いもおらず、そもそもどんな国なのかということさえも知らなかった。そんな私たちが、CamTESOL 2008への参加をきっかけに、カンボジアの若い英語教師たちに出会い、彼らにいろいろと助けてもらいながら再びこの地を訪れ、district governor や village governor に会うチャンスにも恵まれ、今、やっと教育支援への入り口に立っている。なんだかちょっと、わらしべ長者を思い出させる。

今回のカンボジア視察ツアーのプノンペンでの日程は、CamTESOL 2008で知り合った、ACE(Australia Centre for Education)の Sokhom LEANG さんがアレンジしてくれた。私たちが見学した学校は：

(1) ACE(Australia Centre for Education)

(<http://www.cambodia.idp.com/ace.aspx>)

1992年に設立されたカンボジアの設備を誇るプノンペンにある英語学校。



(2) IFC(Informatics and Foreign Language Center)

3名の若いカンボジア人教師によって設立されたコンピュータと外国語の学校。プノンペンから車で30分程の距離にある Takmao という町にある。

(3) University of Cambodia (<http://www.uc.edu.kh/index.htm>)

プノンペンにある新しい私立大学。

の3校である。ACE や IFC では、主に10代の若者が熱心に英語学習に取り組んでいた。彼らが英語を学ぶ目的は、将来良い仕事に就くことや留学することだそうだ。University of Cambodia で見学したクラスは、大学の正規の授業ではなく、一般向けの講座で、社会人がより条件の良い仕事を求めるために通っていた。見学したどの授業も英語で授業が進められていた。また、生徒も積極的に英語で発言していた。



Takmao の District Governor と Village Governor にも会うことができた。Sokhom が「最終日は家



Governor 宅前で Governor 一家と一緒に

でランチをしませんか？」と言うので、お言葉に甘えることになった。その「家」とは、彼女のご主人の両親の家であり、彼女の義理のお父さんは **District Governor** で、その弟が **Village Governor** だった。野菜や果物が売られている露天の並ぶ舗装されていない道の角を曲がると、いきなり大きな家が現れた。それが **District Governor** の家であった。奥さんたちが作ってくれたカンボジアの家庭料理を食べながら、楽しい時間を過ごし、最後には教育支援についての話をすることができた。これから、具体的なことを話し合っていきたいと思う。

来年の2月には、**CamTESOL 2009** に参加するため、再度カンボジアに行く。それまでに、「私たちがしたいこと」や「私たちにできること」と「現地で必要とされていること」や「現地に必要なもの」を見極めながら、**e-dream-s** の教育支援の形を探っていきたいと思う。今回新たに知り合ったカンボジアの若い英語教師たちが、**CamTESOL 2009** の私たちの発表を聞きに来てくれると言っている。1月の冬合宿には、**Sokhom** が参加し、カンボジアの教育事情について話をしてくれることになっている。さらに、彼女は2009年の9月から文部科学省の奨学金で名古屋大学の大学院で開発教育について勉強することになっている。将来は母国の発展のためにユニセフやユネスコで働きたいと言う。国づくり、あるいは自己実現へひたむきにチャレンジを続けるカンボジアの若い教師たちと力をあわせて、**e-dream-s** の教育支援を実現させていきたいと思う。



カンボジアの若い英語教師たちと一緒に

わらしべ長者が村人たちに慕われたのは、わらしべ一本からお金持ちになったからではなく、お金持ちになった後も、自分の原点である一本のわらしべを大切に扱ったからだという。私たちのわらしべは、長年英語教育、あるいは教員研修に携わってきたことである。このわらしべをいかに大きく社会に貢献できるものに換えていくか、同時に、その原点であるわらしべを見失わず大切にしていけることができるか、私たちの真価が問われるところである。**CamTESOL 2009** では、まさに私たちの原点であるアクロスの発音研修についてのワークショップを行う計画である。私たちのわらしべ長者への旅は、今、大きく動き出そうとしている。

“Connecting dots”¹

—カンボジア視察ツアーを終えて—

藤澤 俊之

プノンペン空港に降り立つと、今年2月のCamTESOLで塚本さんを初め、e-dream-sのメンバーが知り合いになった、ソコムさんが、友人のソファンさんと共に出迎えてくださった。私にとっては、初めてのカンボジア、いよいよ視察ツアーの始まりである。空港の駐車場には、たくさんの子供が待ち構えており、私たちの荷物を運ぼうと待ち構えていた。「この光景、どこかで経験したことが。。？」「そうだ！何年か前、ネパール、カトマンズの空港でも確かこのようなことがあった！」ふとその時のことが、脳裏をよぎった。今回もいろいろなことが経験できそう。。

旅先で、現地の人に案内してもらえるほど心強いことはない。今回もソコムさんのおかげで、有意義な視察ツアーになったと思っている。

出会えた人々。

1) ACE (Australian Centre for Education) の先生方。ソコムさんもここで働いており、聞いた話によると、カンボジアで有数の私立の英語学校ということだった。

2) IFC (Informatics and Foreign Language Center) の先生方。こちらも私立の英語学校で、ソコムさんの友人3人が設立者であるとの事。ソコムさんの地元にある学校である。

3) University of Cambodia の先生。もちろんソコムさんの友人。大学付属のESLの授業を受け持っておられ、授業を見せていただいた。

4) ソコムさんのご家族。義理のお父さんのお招きで、昼食をご馳走になった。義理のお父さんは、District Governor をされているという。お宅も、周囲とは一線隔した形で、立派な邸宅であった。また、実のお母さんの家も案内してくださり、弟さんにもお会いすることができた。

5) シェリムアップでお会いすることができた社会事業家の女性。お忙しい中時間を割いて会ってくださった。

今回の旅の始まりの際に、e-dream-s 通信に書いたとおり、やはりこのメンバーで行くと思いがけない幸運が舞い降りてくる！今回も義理のお父さんが、“District Governor”と言うことで、井川顧問が招待していただいた昼食の席で、地元の学校を紹介していただき、何らかの形で支援や交流をしていきたい意向を示し、お願いしてみたところ、前向きに考えていただけそうな感触を得ることができた。あせる必要はない。これから少しずつ実りある話が進んでいけばと思っている。

まずは、ソコムさんが私達の冬合宿に来てくださるので、そこから繋げて行けば良いと思っている。

8月4日（月）、私達が関西空港を旅立つ際、韓国へ旅立つ ECAP2008大阪出発班を見送ることができた。同じ会のメンバーが、方や韓国、方やカンボジア、それぞれ違った方向へ旅立って行く。しかし目的は、きっと同じ。アジアの国の一員であることを自覚し、繋がっていくこと。もちろん“アジアの国”ということに固執するつもりはまったくないが。

アクロス、e-dream-s は、今まで、アジアだけでなく世界各地に交流の輪を求め、研修を重ねてきている。今はまだ、それぞれの出来事が、その時々々の点としてしか認識されていないことも多い。しかし、これらの国々で学び、身に付けてきたことが、今後どのように結びつき、実を結ぶのか楽しみでしかたがない。

1) アップルコンピュータ CEO、スティーブ・ジョブズが、2005年6月12日、米国スタンフォード大学の卒業式で行った演説の中で使われた表現。その時使われた表現は、“Connectintg the dots”

少しの無理

岡田かおる

「今、大きな流れができています。皆さん、少し無理してぜひカンボジアへ一緒に行きましょう。」

e-dream-s の定時会員総会に参加した。年に一度、会員が集まり、前年度の活動や成果を報告し合い、今後の方針が示される総会は、会員の思いを伝え合う場として貴重な機会だ。冒頭の発言は塚本理事のもの。総会が終わった後もいつまでも耳に残り、私の頭の中で繰り返されている。

「少し無理して」が心に残ったのは、いつも面白そうに、楽しそうに大きなプロジェクトをこなしているように見える塚本理事の声だったからだと思う。面白いことをするには、楽しい経験をするには、「少しの無理」が必要なのだ。「無理」の中身は、仕事のこと、家族のこと、自分の体力など、いろいろなことがそれぞれの事情によってあるだろう。誰もが日常の生活や本来の仕事で忙しい。でもその中で私たちは何か社会貢献をしていきたい、アジアの教育支援をしたいという思いを抱き、そして今それを形にしようとしている。もし全く「無理」をしなければ、きっと前へは進まず、何も変化は起こらないに違いない。

普通、仲間同士なら、「無理しないで」と声をかけ合う。私自身も「無理は禁物です」と申し訳なさそうにしている仲間にメールを送ったりするし、また「無理せんでいい」と声をかけられ、安堵することもある。それを敢えて「少し無理して」。だから余計に印象に残った。

「大きな流れ」とはカンボジアでの教育支援実現への流れだ。思い描いていた夢が流れに乗って目的地に向かっていく。今、勢いよく水が流れ出したばかりだ。総会の後、少しの無理をしながらその流れを作っていくひとりになりたいと思った。きっと、少し無理をしてよかったと後から思うはずだ。

総会に参加して

川本剛士

あらためて、e-dream-sにはたくさんの会員がいて、いろいろなことをしていると感じた。私は ACROSS で初級の後期に所属していたので、毎週お会いできる人は、訓練を担当して下さっている企画や実習生の方々、また一緒に訓練を受けている訓練生の方々。月に一回お会いできる方は大阪の会員の方々。大阪以外の会員の方には、冬合宿と総会の年に二回しかない。たくさん会員がいることは頭でわかっているのだが、実際に集まると、これだけの人がいるからいろいろなことができると思った。

「ECAP」、教育支援事業「CamTESOL カンボジアツアー」、FORUM など発音訓練以外にもこれだけのことが勉強できる。またそれぞれ説明していただいた方もすごい情熱をもっている。私はまだまだ自分の発音や、読みに自信がもてないため、どうしても発音訓練に力をおいてしまいがちであるが、しかし、これを機会に他の活動にも家庭の事情が許す限り、もっと積極的に参加していきたいと思った。

定時会員総会に参加して

岡本小枝

「イー・ドリームズ」第9回定時会員総会に出席した。2007年度の事業報告承認と収支決算、2008年度事業方針についての内容であった。話を聞きながら、改めて1つ1つがハイレベルな活動であることを実感した。また、事業内容のわりには、少人数で行っているのかなとも思うと同時に、人数が問題なのではなく、志と行動力を備えた人が多い集団なのだなと思った。

思えば、ACROSSに入会したときに、なんだかよくわからないまま「イー・ドリームズ」に自動入会した。ACROSSには自分の意志で入ったけれど、「イー・ドリームズ」は少し事情が違った。入ってみて様子が少しずつわかるにつれ、こんなすごい団体に何の貢献もしていなくても入れてもらえていて、ラッキーだな、と思った。そのような、入会した人にとって良い面がある一方、もっとPRができればいいのにも思う。(こうすればいい！という具体案があるわけではないのに、勝手なこと言ってすみません。)

Japan Culture Night

理事 山田昌子

9月6日(土) 留学を始めた昨年の8月からお世話になっているThe International House⁷では、毎月1回(土曜の夜)に、文化や国の状況を紹介するCulture Nightが開かれています。私も1度発表してみたいと思っていたところ、その機会がやってきました。ACROSS・e-dream-sのECAPで行うCulture Nightのようなものと想像していただければ結構です。が、参加者は米国人やアジア出身の学生(日本・韓国・中国・台湾出身の学生が多いが、常連にはインド人学生もいる)等様々です。サンフランシスコ州立大学のTESOLプログラムのクラスメートのSさん(日本人)と和食やプレゼンテーションの準備をし、多くの人々の協力を得て、大成功のうちに終わることが出来ました。

米国では、9月が1年(academic year)の始まりです。8月の最後の土曜、多くの留学生が集まったThe International House主催の Welcome BBQ PartyでJapan Culture Nightのお知らせをしたこと、またSさんも私も、友人たち(TESOL Programのクラスメートを含む)を招待し約25名が来てくれたこともあり、前日までの参加予定人数は80名に膨らみ、当日はもっと多かったみたいです。部屋の大きさや食事の準備を考えると、これまでは50名が最大の人数でしたので、破格の参加人数です。うれしい悲鳴とはこのことです。

和食は、ちらし寿司、お好み焼き、チキン南蛮、肉じゃが、てんぷら、おにぎり、湯豆腐、お漬物(浅漬け)、おはぎ(知り合いの日本人女性が作って来てくれました)、駄菓子と冷やし飴(河野さんと稲川さんが8月に持って来てくれました;感謝!)を用意しました。前日、スーパーや中華系の店、Japan Townに買い出しに行きましたが、大きなワゴン車の荷台が一杯になるくらいの大量の食材となりました。ジャガイモは、約50cm四方の大きな袋3つ。チキンも4袋。ご飯だけでも、27合炊いてもらいました。

学期始めの忙しい時期だったので、準備もそこそこ、Sさんと不安のうちに当日を迎えました。正午前から準備を始めましたが、昼過ぎから日本人学生を始め多くの留学生がお手伝いに来てくれたので、私は最初だけ段取りをして、後はSさんやお手伝いの学生たちに任せ、プレゼンテーションの準備をしたり、着物に着替えることが出来ました。

プレゼンテーションの最初は、Sさんと二人で「ふるさと」(1番/アカペラ)を歌った後、米国人Kさんのピアノ伴奏で全員で歌いました。その後、PowerPointを利用し、日本の地理的な位置・人口、二人の出身地(宮崎と京都)、四季、和食(和菓子やお茶も含む)、着物、主な行事等の概略を話し、クラスメートのA君の協力を得て「日本語(標準語、宮崎方言と京言葉)講座」

⁷サンフランシスコでは初めての international students のための NPO。キリスト教会がサポートしている。私は、ほぼ毎週金曜に訪問し、ディスカッションに参加させてもらっています。

をやりました。概略だけでなく、日本は小さい国だけれど、地方によって異なることが多いということも出来るだけ付け加えるようにしました（例えば、お正月の雑煮は基本的にはお餅が入った汁物だけれど、地方によって全く異なるものが入っている等）。また、Sさんも私も日本の中高校の英語教師なので、日本の学校生活を紹介、辻さんの英語の授業で使われたという日本のホームレス状況について短いビデオを見せました。そして日本人学生S君の空手の紹介をお願いし、最後に、参加者と一緒に新聞紙で折り紙（兜）をし、盛り沢山でしたが1時間少しで終わりました。多くの方が質問をしたり、コメントを言ってくださったので、一層盛り上がりました。中でも「刺身の無い寿司もあるの？」という質問は面白かったです。予算の都合で、今回紹介したちらし寿司に刺身がなかったのと、にぎりが寿司と思っているnon-Japaneseが多いせいです。大阪では箱寿司、京都では鯖寿司が有名ですから、この質問の答えは「ある」ですよね！参加者の暖かい支えで、緊張していた私たちもすぐにリラックスして、ジョークを言ったり、楽しいひと時でした。



お陰さまで、多くの人々が、和食が「美味しかった!」、プレゼンテーションも「面白かった!日本人でも知らないことがあった!」と喜んでいただきました。「日本に行きたくなった!」と言ってくださった方々も少なくありませんでした。素晴らしい機会をいただき、多くの人々の協力と援助のお陰で、大きなイベントを終えることができたことに、感謝をしています。大学とはまた違う、貴重な経験となりました。

<写真>上の写真は、（一部ですが）参加して下さったTESOL Programのクラスメートたちです。右の写真は、中国人の友人Mさんと一緒に写真を撮りました。（写真提供は2枚共、Mさんです。）



【お知らせ】

「CamTESOL 2009ツアー」参加者募集

1. 期 間：2009年2月19日（木）深夜～2月23日（月）早朝
2. 訪問先：カンボジア（プノンペン）
3. 費 用：15万円程度（航空運賃、宿泊費、CamTESOL参加費などを含む）
4. 申し込み方法：
「募集要項」にある「参加申込書」に記入の上、中川宛 <nakagawa@e-dream-s.org>にメールにて送ってください。
(申込書が必要な方にはお送りしますので、お知らせください)
5. 申し込み期限：9月14日（日）夜8時

編集後記 会員総会に参加した比較的会員歴の浅い方から新鮮な声が寄せられた。「たくさんの方がいるからいろいろなことができる」、「(e-dream-sは)入会した人にとってよい面があるので、もっとPRできればいい。」多くの会員により支えられているe-dream-s。知恵を出し合い、刺激し合っていくことでより大きな成果が得られることを期待したい。(岡田)